



Title	宮沢賢治「雪渡り」に描かれた近代：狐の示す魅力と疑わしさ
Author(s)	服部, 峰大
Citation	語文. 2022, 119, p. 27-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95245
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

宮沢賢治「雪渡り」に描かれた近代

——狐の示す魅力と疑わしさ——

服 部 峰 大

一、道徳性と「怪しさ」

「雪渡り」は『愛国婦人大正一〇年一二月号』（一）子狐の紺三郎（『愛国婦人大正一一年一月号』（二）狐小学校の幻燈会）に掲載された宮沢賢治の作品である。本作は一九七七年から現在に至るまで小学校国語教科書に掲載され、一九九四年にはアニメ映画化されるなど広く受容されてきた賢治作品の一つである。

本作は早い時期から、信頼しその信頼に答える誠実さが指摘されるなど道徳的な評価がなされてきた。本作を一読した際、人と狐が分かり合う結末にある種の道徳性を読み込むことは妥当な読みといえる。一方で、この道徳性には、近代的知識人と仏教的人間観とが融合した作者の姿や、すべての生物の連帯や共感から賢治が主張した「まことの幸福」が読み込まれるなど、宮沢賢治の作者像が本作の読みに影響を与えていたことも確認できる。

先行研究ではこのような道徳的な読みに対する疑問も提示され

てきた。皆川美恵子は幻燈会を「魔性の白狐たちによって催されている、めくらだましの〈だましの宴〉⁽⁶⁾とし、別役実を迎えに来た兄さんたちが黒い影と表現されていることから四郎とかん子が狐の目にされたと指摘し本作を怖いと評した。さらに清水正は「四郎」は〈死郎〉、〈かん子〉は〈棺子〉と解してきたわたしの目には、二人の子供が〈青白い雪のまん中〉で息絶えた姿が見える。⁽⁸⁾と本作の「怪しさ」を指摘している。これらの論は道徳的な読みを懐疑的に捉えることで本作に深みを与えている。

これらの道徳性を巡る読みに対し、寺田透は「清浄境における人獣交歓の透明な美しさがその話の生命で、モラリティなど問題とするには当たらない」と本作の「美しさ」を指摘し、佐藤通雅は「このすきとおった涙の美しさをうまく説明できないのだ。ただしこのモラリティは、信じれば美しい心になる。」などという教訓の抽出を許さないまでに、透明である。⁽¹⁰⁾と本作の「美しさ」と道徳性を切り離す。この道徳性をいったん切り離す試みは、言語感覚、詩

性、音楽性といった本作の他の魅力に目を向けることに繋がった。一方で、これらの魅力は本作を他の大きな問題と繋げることでもすると作品そのものから離れてしまう可能性を孕んでもいた。本論では、本作に登場する狐世界と人間世界、二つの世界の差異を考察し、その上で、狐がどのような理由から、いかなる手段を用いて人と意思疎通を図ろうとしたのかを、作中で狐が提示する様々な文物から考察する。このような試みは本作に読み込まれてきた狐の「怪しさ」が何に起因していたのかを明らかにする。

二、餅（人）と黍（狐）の世界

本作は、人の子供である四郎とかん子が、雪渡りという自然現象によって子狐の紺三郎と出会い、歌による意思相通、餅と黍団子の贈答に関する問答などから意気投合し、狐の小学校の幻燈会へ行く約束をする（一）。狐の小学校の幻燈会に四郎とかん子が赴き、狐の子供たちと意気投合し、人と狐が分かり合う（二）の二つの話からなっている。

このように本作では人間の世界と狐の世界が描かれる。普段は積極的な接触が無いこの二つの世界はいかなる差異を有しているのか。本作では話を動かす道具として狐の黍団子とそれに対比される人間の餅が何度も登場する。黍団子と餅の持つ意味を探ることとで二つの世界の関係を探りたい。

まずは人間の餅について考察する。餅は、（一）で四郎が「僕らは丁度いまね、お餅を食べてきた」と述べ、（二）では兄の二郎が

狐たちへの贈り物として鏡餅を四郎とかん子に持たせている。本作が発表された『愛国婦人』は一二月号、一月号であり、鏡餅は時節に合った食物であった。また、一月号には正月に関する特集が数多見られ、一月号が正月号としての性格を持っていたことも確認できる。

作中の描写からは、お餅を食べてきた（一）で正月に向けた鏡餅が作られ、鏡餅を幻燈会に持つていく（二）は松の内も終わった頃だと推測される。賢治の故郷である岩手県は餅文化が数多みられる地域であり雑穀を使った餅も珍しくない。ただ、本作の餅は「白いお餅はべつたらこ」との言葉から白米から作られたものと推測される。岩手の食文化では、白米の餅はハレの日の食べ物であり、特別な日に供される食べ物だった。⁽¹⁾同時に、特別な白米の餅は、共食、贈答などの形で社会的な意義を強く有してもいた。⁽²⁾本作で人間世界を象徴する白米の餅は、掲載当時の季節感を匂わせると共に、人間たちが白米中心の価値観を持っていることを窺わせる。

次にこのような餅と対比的に描かれる黍の団子を考察する。黍は主要な穀物である五穀の一つとされる食べ物である。本作が発表された大正時代では現代とは異なり雑穀が日常的に食べられていた。また、岩手県は雑穀食が盛んな土地であり、賢治が作中に雑穀を描くことも珍しくはない。ただ、明治になり米食が中心とした食生活が広まると、雑穀の生産量は年々減少し、雑穀食は貧乏の象徴と見なされていく。⁽³⁾土地に根付いた雑穀栽培の強引な稲

作への転換は、近代東北における飢饉の原因の一つともなった。⁽¹⁴⁾
このように雑穀食が多く見られた東北でも、近代になると米を優位とする価値観が広まっていた。

それでは、実際に岩手県で黍はどのような雑穀だったのだろうか。岩手県の主要農産物には、「主要農産物としては、米・麦・大豆・小豆・粟・稗・蕎麦・馬鈴薯・蘿蔔・果実・大麻・繭・その他がある。」⁽¹⁵⁾と多くの雑穀が含まれるが黍は含まれない。また、一九一八年から岩手県立農事試験場で行われた雑穀及馬鈴薯改良増殖試験でも、粟、稗は見られるが黍は含まれず、一九三一年から一九五四年頃にかけての戦争を挟んだ雑穀試験でも稗、粟が中心となり黍の試験は行われなかった。⁽¹⁶⁾これらのことから岩手県において黍は他雑穀と比べ主要な作物ではなかったと考えられる。本作の冒頭には人間のものと思しき黍の畑が登場する。この畑は舞台となった地域が水田に適さない貧しい地域であったことを象徴すると共に、そんな地域の中で白い餅を食べ、他者に振舞うことの出来る四郎の家の裕福さを印象づける。

では、賢治作品において黍はどのように描かれているのか。賢治作品での黍の使用例は少なく、本作と「グスコープドリの伝記」に見られるのみである。この作品で、黍は物語冒頭、冷害によって両親が失踪する場面の直前に「やつとすこしばかりの黍の粒など持つて帰ることもあれば、なんにも持たずに顔いろを悪くして帰ってくることもありましだ。」⁽¹⁷⁾と描かれ、苦しいブドリ一家の生活を繋ぐ最低限の食として描かれる。また、その後に現れた目の

鋭い男が妹と交換する形でブドリに渡すのは円い餅であり、ここでもそれまで二人が食べていたそば粉やこならの実などの雑穀食と比べて餅が魅力的な物として提示されていた。さらに、本作発表の二年後に発刊される『注文の多い料理店』でも、稗、粟、蕎麦は頻出するが黍は確認できず、これらの雑穀の描き方も豊かでないものの「グスコープドリの伝記」の黍のような生死にかかわる貧困とは結び付いていない。黍は雑穀が多く作られた岩手県においても主要な雑穀ではなく、賢治作品中でも貧しい食として描かれていた。近代に入り米食が主流となり、雑穀が貧乏の象徴となる中、岩手において他雑穀と比べ主要な雑穀ではなかった黍は雑穀の中でも貧しい食べ物であった。

紺三郎は人間が提示した餅に対して黍団子を提示する。しかし、米の餅と黍団子の間には格差が存在した。⁽¹⁸⁾白米の餅に代表される人間世界と、黍団子に代表される狐世界の間には、米文化と雑穀文化という二つの文化の格差が読み取れる。このような格差を作り出したのは米食中心の食生活を推進した明治以降の国策であった。二つの世界の格差は、単なる稲作文化と畑作文化の違いに留まらず、近代的な価値観に基づいてもいたのである。

これまで人と狐という種族差に理由が求められてきた格差は、近代化という問題を含んでいた。では、人と思疎通を図ろうとする紺三郎は近代的な格差をどのように捉えていたのだろうか。

三、紺三郎の優劣観

この近代的価値観に基づいた格差が潜在する二つの世界は「雪がすっかり凍つてまるで大理石のやうに堅く」なる雪渡りという自然現象で一時的に結びつく。そしてそれは四郎とかん子という二人の人間と子狐の紺三郎を接触させる。

人と狐の接触は、接触以前に子供たちが歌っていたわらべ歌を用いて行われる。人と狐のわらべ歌を用いた意思疎通について皆川美恵子は、歌による意思疎通と古代、村々の男女が行った歌垣との類似を指摘している。ただ本論では歌による意思疎通そのものではなく、それがいかに中断されたのかに注目したい。楽しく行われていたはずの意思疎通を中断させたものは何だったのか。

まずは歌による意思疎通を確認したい。四郎が最初に発する「お嫁はしけりや」との掛け声は狐出現以前の歌を引き継いだものであるが、この掛け声は「四郎は少しぎよつとしてかん子をうしろにかばつ」た上で発される。ここには狐に対する人間の警戒心が読み取れる。それに対して紺三郎は「おひげをピンと一つひねって（中略）『おらはお嫁はいらないよ』」と答えており、人間的方法で虚勢を張っている。意思疎通の初期において、人間は狐を警戒し、狐は人間に対し虚勢を張っていた。一方は劣った他者を野蠻と見なし怯え、一方は優れた側の真似をすることで対等に立とうとする、この両者の態度は前述した二つの世界の格差に端を発している。だが、ここで四郎は紺三郎の態度の意味に気付

かず、意思疎通が成立したことに気を良くし、「お嫁がいらないきや餅やろか」と現実的な提案を投げかける。このような人と狐の態度からは、優位であるがゆえに格差に鈍感な人間と、劣位とされるがゆえに格差に敏感な狐という二つの種族の格差に対する認識が読み取れる。

四郎の提案に対し紺三郎は「黍の団子をおれやろか」との逆提案を行う。先ほどのやり取りでは「いらないよ」との返答があったのに対し、ここでは返答はなされず逆提案が行われる。ここで意思疎通は不思議な齟齬を孕んでいる。なぜこのような齟齬が生じたのだろうか。今村仁司は、「他者よりも多く与えるものは、以前に他者から受けた負債をゼロ化しようとする。その負債をゼロにできる人は「マギステル」（主人、首長）の立場に立つことができる。他方、ひたすら受け取る人は「ミニステル」（従者、臣下）の立場におちる。」と贈与²⁰という行為が持つ社会的な意味を論じている。ここで紺三郎は、返答をせず逆提案を行うことで、貰う側でも交換による対等な者でもなく、与える者になろうとしている。人に対して「おひげをピンと一つひね」ることで虚勢を張る紺三郎は、人と狐の格差を自覚し、その上で人の価値観を優れたものと見なししていた。虚勢を張る紺三郎は、それ故に施しを受ける劣者の立場に甘んじる事が出来なかつたのである。

この紺三郎の提案を聞いたかん子は「狐の団子は兎のくそ」と合の手を入れ、かん子の合いの手を聞いた紺三郎は、「熱心に」それが嘘であることを立証し始める。この紺三郎の突然の「熱心」

さは、それまで行われていた歌による意思疎通を破談させる。

なぜ紺三郎はかんの歌にこれほどの反応を示したのだろうか。ここで紺三郎は狐が人をだますという俗説は嘘であると主張する。この主題は後の幻燈会でも繰り返されており、狐に対する偏見が紺三郎を刺激したとする読みが妥当だろう。だが、この紺三郎の言葉を単純に信じてよいのだろうか。紺三郎は、狐に対する偏見は人間が自分の失敗を隠すために創り出したとし、狐の無実を主張する。しかし、後の「火を軽べつすべからず」の幻燈では、騙しこそしないものの、人間の食べ物奪おうとする狐が描かれ、その被害にあったのは四郎とかん子の家であった。にも関わらず幻燈会では「狐の生徒はぬすまない」との歌が歌われている。勿論、こん助が狐の生徒に該当したのかは判然としないが、作中には人に害を及ぼす狐が描かれており、人と狐の関係が一定の緊張感を持っていたことが読み取れる。これらを鑑みた時、狐を一方的に被害者とする紺三郎の主張には怪しさが垣間見える。

では、紺三郎はなぜ「狐の団子は兎のくそ」との言葉に過剰に反応したのだろうか。前述したように、近代において餅と黍の文化は米を優れたものとし、雑穀を劣ったものと見なしていた。ここで紺三郎が過剰に反応したのは、人をだますという狐の俗説に對してではなく、自分たちの文化に属する雑穀食を兎の糞と見下されたからではなかったか。そしてそこには、二つの世界の優劣を理解するが故に過剰に反応してしまう紺三郎の姿が現れている。そもそも本作において紺三郎は他者との関係に敏感な存在とし

て描かれている。紺三郎は人間に対しては、お髭をひねり、丁寧な言葉で語りかけ、幻燈会では立派な燕尾服を着て、真っ白なはんけちでしきりに口を拭きながら現れる。このような紺三郎の姿からは、人間の文化を優れたものと見なし、その文化を真似ることで、人間に並び立たいという願望が読み取れる。一方で、紺三郎は(一)の最後に登場する鹿の子に対し、「いかにもばかにしたやうに、口を尖らせて(中略)あいつは臆病ですから」と馬鹿にする。人に対して過剰に丁寧な紺三郎は、同じ森に住む鹿に対しては横柄な態度で接する。紺三郎はすべての他者に対し丁寧で平等な存在ではなく、あくまで人間に対してだけ良い顔をし、同じ森の生き物である鹿に対しては馬鹿にした態度をとっていた。このような紺三郎の価値観は、二つの世界の格差を理解した上で人間の価値観を優れたものとし、それ以外を劣ったものと見なしていたはずだ。本作において紺三郎は、二つの世界の格差に自覚的であり、人の文化を優れたもの、森の文化を劣ったものと見なす存在として描かれていた。

四、魅力的な砂糖

ここまで、本作に描かれた世界観を考察し、その世界観が紺三郎に与えた影響を考察してきた。では、人と狐二つの世界の格差に敏感で、人の価値観に重きを置き、人に同列に見られたいと欲する紺三郎は、どのような手段で意思疎通を継続したのか。

わらべ歌による意思疎通は破断し、そこから紺三郎は必死に黍

団子を食べさせようと試みる。紺三郎は黍団子を供するにあたり、自分が手ずから作った団子であること、砂糖がかかっていることを強調する。自分で作ったとの主張は黍団子が盗んだものや偽物ではないとの証明になっている。では、砂糖がかかっているとの言葉はどのような意味を持つのだろうか。

砂糖に関する作中の描写を確認すると霜の表現として、「木はみんなザラメを掛けたやうに霜でピカピカしてゐます。」との言葉が確認でき、このザラメは精製された白い白双糖（白ザラメ）を指していると考えられる。作中には黍団子にかけられた砂糖に関する直接の言及は見られず、この砂糖が白かったのか色が付いていたのかは判然としない。また、大正年間の東北や北海道では、他の地域と比べ、黒糖・白下糖の需要が残っており、東北では色の付いた砂糖の方が身近であった。ただ、この色のついた砂糖も沖縄などが主な精製地であり、狐たちが自ら砂糖を精製していたとは考えられない。本作が『愛国婦人』という広い地域で読まれる雑誌に掲載されたことを鑑みると、もてなしに使われる黍の団子の砂糖は、当時、価値があり饗応に用いられた白い砂糖だったと考えられる。

では、本作が発表された一九二二年前後において、紺三郎が魅力的なものとして提示する白い砂糖は、どのような価値、意味を有していたのだろうか。一九一四年に勃発した第一次世界大戦は世界の砂糖価格を急騰させた。日本国内では戦争景気の煽りを受けて砂糖消費量が増加、国内糖価は上昇した。⁽²²⁾このような糖業の

好景気を背景に、台湾を中心に精製されていた砂糖は内地でも生産され、設備の充実によつて精製糖や白糖といった単価の高い白い砂糖の増産が顕著となっていく。⁽²⁴⁾その結果、日本国内では白糖は値下がりし入手が容易となつていった。

一方で、柳田国男は砂糖を中心に文明度を測るという西欧的な考え方を看破し、日本もその考え方を無邪気に受け入れたと、西洋植民地主義的考え方を受け入れる日本人を非難している。⁽²⁵⁾原材料が台湾で作られ、加工後、中国などを中心に輸出されていく砂糖は日本における植民地貿易の中心的商品であり、その精製、販売においても植民地経済と切り離せない商品であった。紺三郎が魅力とする白い砂糖は、世界大戦による戦争景気によつて身近で魅力的になった物であり、同時に西洋的な価値観に基づいた植民地経済と切り離せない物であった。

このような砂糖の同時代における意味合いを考察した時、黍団子に砂糖がかかっていることを魅力とする紺三郎の考え方からは西洋的な価値観が垣間見える。賢治は後に単行本『注文の多い料理店』の序文で「わたしたちは、氷砂糖をほしくらゐるもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。」⁽²⁷⁾と精製された氷砂糖を都会的なものとして批判的に描いた。都会の豊かさを象徴する砂糖は、その更なる背景として植民地経済という近代的な力関係を有してもいた。勿論、同時代における砂糖が現代とは比べ物にならないほど価値を持ち、それを供することがもてなしであったことは間違いない。

ない。しかし、一方で栽培から自分で行ったことを魅力とする紺三郎は、もう一方では植民地や戦争を背景に故郷の森以外で精製された砂糖を魅力的な物として提示する。このような紺三郎の態度からは、黍に代表される狐の文化よりも、砂糖が持つ人間世界の近代的な価値観にこそ共感していることが窺える。人間に対して砂糖の魅力を強調することで並び立とうとする紺三郎は、砂糖を価値あるものとする近代西洋的価値観を無邪気に受け入れた存在でもあった。同時にこのような分かりやすい形で人を惹きつけようとする紺三郎の姿は疑わしいものとして読めてしまう。

五、狐の「小学校」

五・一、狐の幻燈会

紺三郎が提示した黍の団子は、砂糖という西洋的価値に基づいた魅力を持っていたにも関わらず四郎に断られる。だが紺三郎はその代わりに狐の幻燈会への入場券を渡すことに成功する。前述したように、紺三郎が人間に対して提示した魅力には近代的な人間の価値観が含まれていた。では、黍団子の代わりに提示された狐の幻燈会はどのような価値観を持っていたのか。「(二) 狐小学校の幻燈会」を確認したい。

紺三郎との約束を「思ひ出し」た四郎は、かんと共に兄の二郎に持たされた鏡餅を持って幻燈会に向かう。その際、二郎は二人を止めようとしなない。そこには、人間にとって子狐が必ずしも危険な存在ではないとの認識が読み取れる。同時に、「大人の狐に

あつたら急いで目をつぶるんだよ。」との注意からは大人の狐と人間の間には緊張関係があることも読み取れる。また、約束を「思ひ出し」た四郎には、狐との約束を心待ちにしていた風はなく、人間の狐に対する関心の低さが窺われる。

二人が幻燈会に着くと立派な燕尾服を着て水仙の花を胸につけた紺三郎が現れる。この正装は司会の格好と考えられるが、係りの子狐が胸にどんぐりの記章をしているだけであることを鑑みるといささか過剰といえる。後の幻燈に写る紺三郎は白い袴をはいており、狐の世界の普段着が和服であったことを窺わせる。立派な燕尾服を着て、真っ白なハンカチでしきりに口を拭く紺三郎の姿からは、洋装という人間の近代的な価値観に則ることで自分を立派に見せようとする魂胆が透けて見える。ここでも紺三郎は狐ではなく人の価値観に則ることで自分を立派に見せようとする。では、紺三郎が司会を務める幻燈会とはどのような場だったのだろうか。幻燈は明治の中頃、識字率の低い「婦幼又ハ俗人」を対象とした教育的な装置として使用されていた。明治二十四年の子供向け雑誌『少国民第三年』⁽²⁸⁾には、石油ランプを使った幻燈の自作に関する説明記事があり、幻燈が子供にとって身近なものだったことが窺える。

しかし、大正年間に入ると幻燈は活動写真に取って代わられていく。米と黍の格差と同じく、ここでも狐は人の文化に少し劣る存在として描かれる。古めかしい幻燈会に立派な燕尾服で現れ、丁寧な言葉を使う紺三郎の姿からは、幻燈会という古めかしい催

物を立派に見せようとする態度が見て取れる。このような態度は、人と狐の格差を理解し、それを埋めようとしたことに端を発する。(二)で描かれる狐小学校の幻燈会は、本作発表当時の読者に少し古臭くいかにも子供向けとの印象を与え、そんな場所に立派な燕尾服で現れる紺三郎の姿はいかにも場違いに読める。ちぐはぐな近代性で必死に人間の文化を真似、人と並び立とうとする紺三郎の姿は、読者に可笑しさと疑わしさを感じさせる。

五・二、近代教育と小学校

本作発表当時、幻燈は教育的な装置として使用されていた。では狐の幻燈会の持つ教育性とはどのようなものだったのだろうか。幻燈会で映される幻燈の内容を確認したい。狐の幻燈会では、「お酒をのむべからず」、「わなを軽べつすべからず」、「火を軽べつすべからず」と三つの題に沿った四枚の幻燈が映される。禁止を表す「べからず」が繰り返されるこれらの表題からも、この幻燈会がある種の教化を目的としていたことが読み取れる。ただしこの教化は「わなを軽べつすべからず」との題からも窺えるように狐に向けられており、人間世界の一般的な教育とは差異を有していた。

次に紺三郎の司会に注目したい。幻燈会は、幻燈にあわせて歌われる歌、人間が黍団子を食べたことを喜んで歌う歌、司会の紺三郎による閉会の辞など幻燈以外の要素によって意味付けられており、これらを統括する司会が重要な役割を果たしていた。中で

も喜びの歌と閉会の辞では幻燈で示されたものとは異なる教化が確認できる。

四郎とかん子が黍団子を食べる姿を見た子狐たちは喜んで歌を歌い始める。この歌には、「キツクキツクトントン」との四郎とかん子、紺三郎の出会いから生まれたリズムが取り入れられており、この歌が(一)と(二)の間に紺三郎によって作られ、子狐たちに教えられたことを窺わせる。この歌では「うそ云ふな」、「ぬすまない」、「そねまない」と三つの教育的な題目が掲げられる。ここで歌われた「うそ云ふな」「ぬすまない」は、四郎とかん子に供された黍団子が本物であったことを指している。また、「うそ云ふな」という主題は当時の修身教科書にも確認する事が出来、この教化が幻燈に見られる狐的な教訓ではなく、人間の近代的な教育に類似していたことが確認できる。では三つ目に歌われる「そねまない」は何に起因していたのだろうか。作中で子狐たちは人間の子供に興味を持っているが、そねんでいるような描写は見られない。この歌を作り、広めたのは人の価値観を優位と考え、幻燈会を統括する紺三郎であった。だとすると、人間をそねんでいたのはこの歌を作った紺三郎ではなかったか。少なくとも、紺三郎が作ったと思われる歌では、幻燈の教訓的な教化ではなく、人間の修身的な教化が行われている。

また、紺三郎が行う閉会の辞でも、「みなさんはこれから、大人になつてもうそをつかず人をそねまず私共狐の今迄の悪い評判をすつかり無くしてしまふだらうと思ひます。」と、幻燈の主題と

はずれながらも、幻燈会における学びを大人になっても活かす道が提示され、結果として人と狐が対等となる未来が示される。この閉会の辞を聞いた狐の生徒は「みんな感動してワーツと立ちあがり（中略）みんなキラキラ涙をこぼす」。一方で、この言葉を発した紺三郎は「丁寧にお辞儀」をするだけで狐の生徒の感動からは距離を取る。このような紺三郎の一人冷静な態度からは、幻燈会を取り仕切る年長者として参加者を教化する司会という役割を意識的にこなしている様が確認できる。

ところで、このような紺三郎の幻燈会の司会は単に彼個人の考えに基づいて行われたのだろうか。人と狐の世界が一定の距離を持って描かれる本作において、子狐の紺三郎が自分で人間世界について詳しく学ぶことは難しかったはずだ。紺三郎の言葉は狐小学校の幻燈会の司会という立場から発せられていた。紺三郎が語る、人と狐が同列の立場になるという夢は、彼個人のものではなく、彼を教育した狐小学校のものではなかったか。紺三郎が行う教化の背後には、彼を教育した場としての狐小学校の姿が垣間見える。

では、紺三郎を教育した狐小学校とはどのような場所なのだろうか。賢治は「（二）狐小学校の幻燈会」発表と同時期の一九二二年初秋から一九二三年春ごろに書かれたと思しき「茨海小学校」でも狐小学校を描いている。この作品では本作と同じく狐独特の教育が描かれるが、一方で、食品化学といった人間の学校と類似の教科が設定されていた。⁽³¹⁾このような「茨海小学校」の描写は、狐

の価値観に基づいていながらも当時の学校生活や教育の参考にし得る物であった。⁽³²⁾「茨海小学校」の狐小学校は狐らしい特徴を持ちながらも現実の学校と多くの類似点を有していた。このような特徴は本作にも相通するものがある。日本語で書かれた入場券を配り、罨に対する警句など狐独特の価値観を教えつつも、最終的には「うそ云ふな」「ぬすまない」「そねまない」といった人間にも通じる修身的な教化を行う狐小学校の幻燈会は、狐的な価値観を持ちながらも現実の小学校における教育を思い起こさせる。

このように狐小学校との類似が見られる同時代の小学校とはどのような場所だったのだろうか。明治政府は近代国家建設の基礎として、近代教育制度を確立しようとした。一八七二年九月四日に発布された「学制序文」では、個人主義、実学主義などの教育の標榜、基礎的な学校教育を全ての人々に付与しようとする制度といった近代的な教育宣言がなされている。⁽³³⁾その翌年、学制が全国に施行され日本全国に小学校が作られていった。

アーネスト・ゲルナーは近代と学校の関係について、流動的な近代社会において、精神的市民権を享受する際に必要な概念的共通通貨である読み書き能力、技術能力の水準は親族や地域単位では供給できないほど高度であると指摘し、こういった高水準の能力は「国家的」教育制度によつてはじめて供給され得ると指摘している。⁽³⁴⁾近代において「小学校」という場合は、地域ではなく、国家と繋がりの深い場所であった。このような「小学校」の役割を考えた時、本作の狐小学校もまた、狐による地域単位の教育では

なく、狐社会による高水準の近代的な教育を行う場だったと考えられないだろうか。少なくとも、人の言葉で書かれた入場券や幻燈の表題を作る姿からは、狐社会が人間の言語を学び、日常的に使用していることが見て取れる。また、子狐向けに作られた入場券の「学校生徒の父兄にあらずして十二才以上の来賓は入場をお断はり申し候」との言葉からは、狐たちが人間の言葉のある程度読み書き出来る様子が窺われる。子狐全てがこの文章を読めなかったとしても、このような言語教育を行う場所として狐小学校は存在していた。狐たちが「小学校」を必要としたのは、狐たちが人間と同じ近代社会という土俵に乗ろうとしていたからに他ならない。

「狐の幻燈会」や「狐の学校の幻燈会」ではなく、「狐小学校の幻燈会」と描かれる本作の幻燈会からは、狐社会が「小学校」という近代的な制度を持っていたことが確認できる。近代的な社会に適応するための教育を受けさせる場としての学校は国家の影響を受けずには成立しえず、そこでは地域的な教育ではなく西洋を範とする近代的、国家的な教育が行われていた。本作で描かれる狐小学校もこのような近代国家による公教育と類似の特徴を有した場として読むことができる。

「茨海小学校」に出てくる狐小学校は上級の学校を持ち人間の学校でも通用し得る食品化学の授業を行っていた。本作の狐小学校でも、小学校という近代的な学校制度が適応され、そこでは一定以上の人間語の言語教育、人間世界にも通じる修身的な教育目

標が確認できる。この二作を単純に繋げて読むことはできないが、賢治が描いた二つの狐小学校は、どちらも狐世界独特の理屈を持ちながらも、人間世界と類似の近代教育制度に基づいた「小学校」として描かれていた。本作の狐小学校は、人間世界と隔絶した狐世界独自の教育を行う場としてではなく、近代的な教育制度によって成立した人間世界の「小学校」に類似する場所であった。そしてそれは狐世界もまた近代化の影響を受け、人間世界と類似の近代化を目指していた証左といえる。

このような狐小学校の教育は、子狐たちに森の共同体の文化ではなく、西洋を範とする人間の文化にこそ価値を見出させる。少なくとも司会の格好に、袴ではなく立派な燕尾服と真っ白なはんけちで現れ、修身的な閉会の辞で幻燈会全体に意味付けを試みる紺三郎からは近代的な人間文化の影響が見て取れる。本来は鹿などと同じく森の生き物であった本作の狐は、近代的な学校制度を受け入れ、これまでの狐に対する悪評を人間の責任として読み替え、人間と同程度の読み書き能力を持つことで人と並び立とうとする。このような狐たちの態度からは、近代における文化的物差しで野蠻と差別されることを避けようとする狐社会のありようが見て取れる。同時に、人間よりも遥かに身近に住んでいる同じ森の生き物である鹿を馬鹿にする紺三郎の態度からは、教育の結果として狐たちが自分たちを文化的で賢いものと見なし差別する側に回りつつあることも確認できる。人間の文化を優れたものとし、人間に並び立とうとする紺三郎の考えは、彼個人のものではなく、

近代的な人間の価値観に重きを置いた狐社会による教育の成果ではなかったか。

本作は、四郎とかん子が狐の黍団子を食べ、人と狐がわかりあい、二人が家に帰るところで終わる。だが、このように人と狐が分かり合えたのは、人と狐が類似の価値観を持っていたことに起因しないか。本作の相互理解は、信頼だけに基づくのではなく、人と狐が「近代」という共通した価値観を持っていたからこそ成立し得た。

本作は一見、信じることで俗説を覆し、異種族が分かり合える未来を示した道徳的な作品として読む事が出来る。一方で、このような読みに対して疑わしさを感じる読者も多くいる。なぜ本作に疑わしさを感じるのか。本作で描かれた小学校の幻燈会は読者対象である子供向けに描かれており、前述した砂糖も子供たちにとって魅力的なものを描いただけだったはずだ。賢治が本作に登場する文物が持つ問題に自覚的だったとは思えない。だが子供にもわかりやすく魅力的な物や場を登場させる本作の試みは、結果としてその文物が持つ近代の問題を本作に読み込む余地を残した。そしてそれは必死に人を惹きつけようとする狐に対する疑わしさを生む。これまで狐であることに原因が求められてきた本作の疑わしさは、登場する文物が持つ近代的な意味合いと、その背後に近代の問題を読み込める余地があることに起因していなかったか。人と並び立とうと必死に手練手管を使う紺三郎の姿は確かに疑わしい。だが、このような紺三郎の態度は、「小学校」という近代

的な場で培われており、それ故に紺三郎が提示する文物は近代的な人間の価値観を持ち、本作に近代の問題を読み込む余地を与える。子供向けに楽しい幻燈会を描き、小学校や砂糖といった身近で魅力的なものを描いた本作は、それらの文物の根底に近代の問題を読み込む余地を持つことで読者に違和感を与える。森(野蜜)から抜け出し、手練手管を使って人(文明)と並ぼうとする狐の姿は、身に合わぬ近代化(西洋化)に奔走する滑稽な姿に読める。そういった意味では、本作は狐を通して近代化の寓話として読むことのできる作品であった。

*本論は令和四年度大阪大学国語国文学会での口頭発表に加筆、修正を施したものである。

注

- (1) 「物語を読む雪わたり」『新版国語五年下』教育出版一九七七年六月一―一六―一三三頁(大高利夫『読んでおきたい名著案内教科書掲載作品小・中学校編』日外アソシエーツ二〇〇八年一二月参照)
- (2) 監督四分一節子「雪渡り」共同映画一九九四年七月一六日封切
- (3) 小沢俊郎「狐考」『四次元第四巻第五号』宮沢賢治友の会一九五二年六月二頁
- (4) 続橋達雄「ファンタジーの多彩な展開」『宮沢賢治・童話の世界』桜楓社一九七五年十月八六頁
- (5) 恩田逸夫「宮沢賢治「雪渡り」と「注文の多い料理店」」『宮沢賢治論3 童話研究・他』東京書籍一九八一年十月六七頁

(6) 皆川美恵子「雪渡り」から「水仙月の四日」へー(囃し)の饗宴、(仮死)の祭典』『日本児童文学史上の七作家三 宮沢賢治千葉省三』大日本図書一九八六年十月一四頁

(7) 別役実「二つの世界の出会い」『イーハトーボゆき軽便鉄道』リポポート一九九〇年一月一七〇頁

(8) 清水正「雪渡り」を読むー白狐の紺三郎は子供と読者を騙したー清水正、峰村澄子、山下聖美編『ケンジ童話の授業「雪渡り」研究』C文学研究会二〇〇五年五月三五頁

(9) 寺田透「宮沢賢治の童話の世界」『芸芸読本宮沢賢治』河出書房新社一九七七年一月四四頁

(10) 佐藤通雅「雪渡り」論「すばる児童文学研究 宮沢賢治童話の世界」すばる書房一九七七年三月九七頁

(11) 「日本の食生活全集 岩手」編集委員会「岩手県央の食 II 基本食の加工と料理」『日本の食生活全集③ 聞き書岩手の食事』農山漁村文化協会一九八四年九月一三七―一三九頁

「白米のごはんは、年取り、正月、お盆に食べるくらいで、もちにつぐ晴れ食である。(中略) もちは最高の晴れ食で、このあたりでは、暮れ(お供えもちと鏡もち)、小正月、節句(三月、五月の節句もち)、土用(夏の土用もち)、祭り、そして秋の庭はらえ(秋もち)にもちを搗く。」

(12) 安室知「第1章 民族世界における餅の意義 その社会性に注目して」『餅と日本人「餅正月」と「餅なし正月」の民俗文化論』吉川弘文館二〇二二年一月三一頁

(13) 井上直人「雑穀と精白」『おいしい穀物の科学 コメ、ムギ、トウモロコシからソバ、雑穀まで』講談社二〇一四年六月九九―一〇九頁

「日本人の食生活は明治時代以後に激変した。特にアワ(写真4―1)、ソバ、ヒエ(写真4―2)、キビのような雑穀の摂取量が激減

し、コメを主食とする日本人が圧倒的になった。(中略) イネ以外の穀物にはアワやキビ、ヒエなどがよく知られている。(写真4―5) これらはもっぱら自給用として栽培されたが、イネのような特別な地位はなく、近世末期には商品作物にも押され、「貧乏」の象徴のように粗末に扱われるようになってしまった。」

(14) 赤坂憲雄「歴史を笑え、と幼い詩人に祖父は教えた」『東北学／忘れられた東北』講談社二〇〇九年一月四二、四三頁

(15) 岩手県「農業経営の変遷」『岩手県史第九巻近代篇四』杜陵印刷一九六四年八月四七八頁

(16) 仲條真介「岩手県における雑穀研究のあゆみとその考察」『岩手県農業研究センター研究報告第十号』岩手県農業研究センター二〇一〇年三月九一頁

(17) 宮沢賢治「グスコブドリの伝記」『児童文学第二冊』文教書院一九三二年三月(引用は『新』校本宮沢賢治全集第十二巻本文篇』筑摩書房一九九五年一月二〇〇頁による)

(18) 増田昭子「差別の食Ⅱ雑穀」『雑考の社会史』吉川弘文館二〇〇一年二月二六頁

「正月の雑煮の餅に粟や黍などの雑穀の餅が入っているかどうか質問する「非常識」さを非難する口ぶりが返ってくるときもままある。このように米の餅と雑穀などの餅の間には格差がある。格差こそが優劣観を生む。」

(19) 皆川美恵子「雪渡り」から「水仙月の四日」へー(囃し)の饗宴、(仮死)の祭典』『日本児童文学史上の七作家三 宮沢賢治千葉省三』大日本図書一九八六年十月一〇四、一〇五頁

(20) 今村仁司「交易としての贈与ー共有される負債」『交易する人間贈与と交換の人間学』講談社二〇一六年五月一三六頁

(21) 社団法人糖業協会編「台湾以外の各地における製糖業の動向」『近代日本糖業史下巻』勁草書房一九九七年四月二六九、二七〇頁

(22) 社団法人糖業協会編「砂糖市場の変動」『近代日本糖業史下巻』
勁草書房一九九七年四月六九～七四頁

(23) 社団法人糖業協会「第2期における日本糖業」『糖業技術史—原
初より近代まで—』丸善プラネット二〇〇三年一月一九九頁

「日本内地の精製糖工場はその後、特に大正の初期、第一次大戦勃発
直前から大正12年ごろにかけて新設増設・買収が続いた」

(24) 平井健介「ジャワ糖問題の発生—東アジア間砂糖貿易の再興—
『砂糖の帝国 日本植民地とアジア市場』東京大学出版会二〇一七年
九月六二頁

「製糖技術の向上は、白糖生産の拡大という形でも見られた。(中略)
砂糖価格が下落する」(19)年代には、高利益が期待できる白糖の生
産が活発化した(19)年代後半には砂糖生産量の約10%に達した」

(25) 柳田国男「菓子と砂糖」『明治大正史Ⅳ世相篇』朝日新聞社一九
三一年一月(引用は『柳田国男全集第五巻』筑摩書房一九九八年一
月三八四、三八五頁より)

(26) 平井健介「序章「砂糖の帝国」とアジア」『砂糖の帝国 日本植民
地とアジア市場』東京大学出版会二〇一七年九月一九頁

「製糖業を除いて、帝国全土に分布した産業は存在しない。(中略)
日本・植民地間の貿易はアジアで最大の貿易環節であったが、植民
地糖は、その最大の商品であった(19)世紀前半のアジアに形成され
た帝国日本は、砂糖によって結ばれる「砂糖の帝国」であったので
ある」

(27) 宮沢賢治「注文の多い料理店 序」一九二三年十二月二十日(引
用は『新』校本宮沢賢治全集第十二巻本文篇』筑摩書房一九九五
年一月七頁)

(28) 青山貴子「戦前期の娯楽と教育を取り巻く映像メディアの系譜—
写し絵・幻燈・活動写真—」『遊びと学びのメディア史 錦絵・幻
燈・活動写真』東京大学出版会二〇一九年二月一九五、一九六頁

「明治二〇年代になると、幻燈を教育教材として活用するための、
ハウツー本も種々出てくるようになる。たとえば一八八九(明治二
二)年の教育品製造会社による「幻燈使用法」では、(中略)上映
の対象者について、「婦幼又ハ俗人」といった識字率の低い集団な
どを具体的に想定したうえで教育上の効用を解き、幻燈機の使用方
法について丁寧に説明している。(中略)幻燈は写し絵以来の娯楽
文化の延長上に位置づけられつつも、写し絵とは異なる「教育的」
な装置として、意識的に移入された。」

(29) 「幻燈会」『少国民第三年』学齢館一八九一年四月一四～一六頁
(30) 文部省「ウソライフナ」『尋常小学修身書巻二』文部省一九一八
年二月一二頁

(31) 宮沢賢治「茨海小学校」(引用は『新』校本宮沢賢治全集第九巻
童話(Ⅱ)本文篇』筑摩書房一九九五年六月一四三頁)

(32) 中地文「『茨海小学校』—「大へん参考になります」の意味する
ところ」『国文学解釈と鑑賞第六六巻第八号』至文堂二〇〇一年八
月一〇八頁

(33) 文部省「近代教育制度の創始と整備」『学制百二十年史』ぎょう
せい一九九二年十一月一五、一六頁

(34) アーネスト・ゲルナー加藤節監訳「産業社会」『民族とナシヨナ
リズム』岩波書店二〇〇〇年十二月五七頁

*本文引用は『新』校本宮沢賢治全集第十二巻 童話Ⅴ・劇・その他本
文篇』筑摩書房一九九五年十一月による。

(はっとり・たかひろ 本学大学院博士後期課程)